

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

— 世紀末都会幻想 —

金 井 公 平 三 浦 清 宏

A Comparative Study of English and Japanese Weird Fiction— Fantasy in the End of the 19th Century London —

Kohei KANAI Kiyohiro MIURA

In 1895 Arthur Machen (1863 – 1947) published *The three Impostors*, a novel which testified to the vast respect he entertained for the fantastic, *New Arabian Nights* (1882) manner of R.L. Stevenson (1850 – 1894). Soseki Natsume (1867 – 1916) serialized *Higansugimade* (*Till after the Vernal Equinox*) in *Asahi* in 1912. Keitaro Tagawa, the hero of the novel read *New Arabian Nights* with absorbed interest in his high school days. Keitaro and Prince Florizel of Bohemia, the hero of *New Arabian Nights* share a taste for ways of life quite adventurous and eccentric. Like Keitaro and Prince Florizel, Mr Dyson and Mr Charles Philips, the two major characters, in *The Three Impostors* are also the so called idle rich (Koto – yumin).

These three Novels, though between *The Three Impostors* and *Higansugimade* there is no direct influential relation, show structurally common features. Firstly, each of them consists of a series of stories loosely put together. Secondly, they deal, for the most part, events or happenings peculiar to city life, especially London in the end of the 19th century.

In *New Arabian Nights*, the scene of the stories is London mainly. As for *The Three Impostors*, though in some stories the background shift to some places outside of London, the foreground is always London. The main scene of *Higansugimade* is Tokyo. But Soseki's experience in London life for two years has an important influence on Keitaro's adventure.

The adventures of the heroes or the major characters often include pursuits of persons in the crowded or deserted labyrinthine streets. The acquaintance arises "from one of those myriad chances which are every day doing their work in the streets of London." Coincidental accidents frequently occur. Unstablens and uncertainty are predominant in everything. For example, accidental time lag is the most important element in constituting the whole structure of *The Three Impostors*. Things change at any moment. When one of the impostors appear again in a different story, he or she behaves as another person using a different false name. In *Higansugimade* Keitaro is attracted by a lady waiting for someone at a streetcar stop. She looks like quite another person each time he steals a glance at her from a different angle. Further, physical change in human body, that is to say, transformation really takes place. A young man named Francis in *The Three Impostors* resolves into a dark putrid mass. This transformation has a metaphorical meaning

expressing the pressures and frustrations caused by rapidly changing urban life.

Therefore, though the narrative form follows that of *Arabian Nights*, the structure of these three Novels is subject to physiology of big city.

＜＜共同研究＞＞

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

— 世紀末都市幻想 —

金 井 公 平 三 浦 清 宏

アーサー・マッケン (Arthur Machen, 1863 - 1947) は『三人の詐欺師』(*The Three Impostors*) を1895年に出版している。この作品はR.L.スティーヴンスン (Robert Louis Stevenson, 1850 - 1894) の『新アラビア物語』(*New Arabian Nights*, 1882) に影響を受けている。また夏目漱石の『彼岸過迄』(明治45年1月1日から同年4月29日までの朝日新聞に掲載) にもこの『新アラビア物語』に関する言及がある。これらの三作品に共通することは、いずれも短編がつなぎ合わされて長編小説を構成していることと、作品の舞台となる場所が、主として大都会、ロンドン、パリ、東京などであることである。さらに迷宮のごとき大都会を舞台にくり広げられる追跡や尾行といった探偵小説的要素、偶然が織りなす様々な出来事によって事件が展開していくことなどが考えられるが、そうした類似性や共通の要素は、新しいものも古いものもひっくるめて膨張していく大都会の特質から出てくるのである。

『彼岸過迄』の前半で活躍する田川敬太郎は「異常に対する嗜欲」(1) が強く「都の真中に居て、遠くの人や國を想像の夢に上して楽しんでゐる許でなく、毎日電車の中で乗り合わせる普通の女だの、又は散歩の道すがら行き逢ふ實際の男だのを見てさへ、悉く尋常異常に奇なあるものを、マントの裏かコートに忍ばして居はしないだろうか考える」(2) ような人物である。彼のこうした傾向はすでに、高等学校の頃から顕著であり、大の英語嫌いだったのだが、英語の教科書にスティーヴンスンの『新アラビア物語』が使われると、がぜん興味をかき立てられ、一回も予習を怠らず、あてられれば必ず起立して訳したほど熱心に読んだのである。その時、敬太郎は英語の教師に19世紀のロンドンに、実際物語の中で起きるような事件があったのかと質問する。その英語教師は英国留学から帰ったばかりであり、「黒いメルトンのモーニングの尻から麻の手帛を出して鼻の下を拭いながら、十九世紀どころか今でもあるでせう。倫敦という所は實際不思議な都です」(3) と答える。

この英語教師はまさに漱石自身をほうふつとさせる。『彼岸過迄』には漱石のロンドンでの体験が影響を及ぼしているのである。彼は熊本第五高等学校教授のとき、文部省に二年間の英国留学を命ぜられる。明治33年(1900)9月8日にドイツ汽船で横浜を出発、10月28日ロンドンに到着した。ロンドン市到着の翌日、市内見学に出かけた漱石は、ボーア戦争から帰還した義勇兵を迎える市民の雑踏に巻き込まれてしまう。「倫敦も今日出で見たれども見当がつかず二十返位道を聞て漸く寓居に還り候」(4) と鏡子夫人への手紙にあるように、目抜

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

き通りであるオックスフォード・ストリーのあたりを右往左往したのである。この漱石が右往左往したロンドンとアーサー・マッケンの歩きまわった世紀末ロンドンとはそう時代は違わない。またこのロndonはシャーロック・ホームズとワトソンが活躍した頃のロンドンでもあり、『吸血鬼ドラキュラ』(Dracula, 1897)のドラキュラ伯爵が、はるばるトランシルヴァニアから乗りこんで来て、ヘルシング教授率いる国際狩猟団と文字通り血みどろの闘争を演じるロンドンでもあった。

在留の旧知もない漱石は、一枚の地図を頼りに、毎日見物のためもしくは用たしのために一人で市内を出歩いた。『倫敦塔』(1905)の冒頭近くには次のような記述がある。

無論汽車へは乗らない馬車へも乗れない、滅多な交通機關を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此廣い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電氣鐵道も余には何等の便宜をも興へる事が出来なかつた。余は己を得ないから四ツ角へ出る度に地圖を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地圖で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時は又外の人に尋ねる。何人でも合點の行く人に出逢ふ迄は捕へては聞き呼び掛けては聞く。かくして漸くわが指定の地に至るのである。(5)

留学したばかりの漱石にとって、ロンドンに蜘蛛手十字に広がる迷路そのものであった。しかしウエールズの片田舎で生まれロンドンに出てきたアーサー・マッケンにしても、スコットランドのエディンバラから出てきたスティーブンスンにしても状況はそう変らなかったであろう。際限ないほどに肥大化し膨張していくロndonは国内の地方人のみならず、世界中の人々を引き寄せ吸収していたのであり、その意味で大都会というものはその内部に地方も外国をも内包していると考えられるのである。

漱石は強度の神経衰弱に悩みながらロンドン市中での逗留先を転々とする。1900年10月28日から1902年12月5日までのおよそ2年間の滞在中に下宿を5回も変えている。第一の宿は、ガワー・ストリート76番地であり、大英博物館やロンドン大学にも近い所である。下宿代が高く月150円の留学費(当時1ポンドは約10円)ではまかなえぬため、ウエスト・ハムステッドのプライオリイ・ロード85番地に移る。新聞広告で見付けたらしいこの第2の宿は、東京の小石川のような閑静な住宅地であつたらしい。約40日間居たその下宿では契約違反などがあり嫌気がさし次に、チームズ河の南、フロッドン・ロード6番地の下宿に変わる。下宿料は安い、東京の深川、つまり「橋向こうの場末」(6)のような所で、窓に隙があり風が吹き込み、家具もほとんどない三階の部屋であつた。第4の宿はツーチング・ステラ・ロード5番地で、第5の宿はザ・チェース81番地にあり1901年7月20日から1902年12月5日までの約504日間ここに落着くことになる。

第5の下宿に腰をすえると漱石は、がぜん勉強を始める。観劇も止め、授業を受けていたク

レイグ先生の所に行くのも止め、市内見物にもほとんど出かけず、宿にこもり日夜読書とノートをとることに明け暮れる。彼が一大著述を思いたち、生物学や進化論、心理学の本などまで読みふけるうちに、相当強度の神経衰弱に落入ってしまう。そして漱石がロンドンで発狂したという電文が実際に日本に送られるほど一時はひどい状態に落ち入る。

倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあって狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あわれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油のなかに、一滴の水となって辛うじて露命を繋げるは余が当時の状態なりという事を断言して憚らず。(7)

ロンドン滞在中に漱石が近代における都会の孤独と憂鬱を徹底的に味わったことは確かである。だが『彼岸過迄』の田川敬太郎はロマンチックな期待を抱いて、友人須永の叔父田口からの仕事の依頼を待ち受ける。彼は田口との会見の後、「自分に都合の好い結果が、近い内にわが頭の上に落ちて来るものと固く信じる」(8) ことが出来るほど楽天主家なのである。田口からの仕事の依頼は速達で届き、その内容は、その日の4時から5時迄の間に、三田方面から電車に乗って、小川町の停留所で下りる40格好の男がいるが、その男の服装は黒の中折帽をかぶり霜降の外套を着、顔は面長で、背が高くやせぎすの紳士で、眉と眉との間に大きなホクロがあるのが特徴であり、その男が電車を降りて2時間以内の行動を探偵して報告しろというものであった。田口の指示を実行することは、混雑するにぎやかな小川町の状況や多数の乗客が停留所で乗り降りすることなどを考慮すると、いかに服装やその人物の特徴が分っていたとしても、相当困難な仕事であった。しかし予期しない様々な不確定要素や偶然の出来事が起るからこそ、大都会の雑踏の中での追跡や尾行は魅力的なのである。現実的には不可能に近いような事が小説の中で可能になるのは、多くの場合マイナスに作用するはずの不確定要素や偶然が何故かプラスに作用するからである。そして敬太郎の冒険は、何度も偶然に助けられて続行可能となる。このいわば一連の好运は、彼が自分のこれから進むべき方向を決しかねて占ひの婆さんに見てもらったことから始まる。婆さんに「自分の様な又他人の様な、長い様な又短かい様な、出る様な又這入る様なものを持って居らっしゃるから、今度事件が起ったら、第一にそれを忘れないようになさい」(9) と言われ、下宿代を払わずに満州に流れていった森本が置いていったステッキを持って出る。そのステッキは竹製で、握りに蛇の頭だけの彫刻がついていて、その蛇が口を開けて何かを呑み掛けているという形をしている。三田方面から小川町で降りる停留所が2ヶ所あり、その停留所の間隔が一町近くあることを発見し、敬太郎はどちらの方を見張ろうかと迷うが、人にぶっかられて地面に振り落したステッキの頭が偶然指している方の停留所を迷わず選ぶ。

敬太郎が目ざす男性を見つけることが出来たのは、彼と同様に停留所の近くにじっと立っている女性に注意を引かれ、4時から5時という男性が降りるはずの時間が過ぎてもまだぐず

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

ぐずしていたからだだった。敬太郎はその女性が須永の家を訪ねた際に一足先に入る後姿を見かけて以来、ことごとにあれこれと想像をたくましくしている当の女性であることはもとより知らない。にもかかわらず、彼は好奇心をそそられ彼女を観察する。しかし彼の熱心な観察によっても、その女性が処女なのか細君なのかも見極めがつかないし、一瞬娼婦ではないかとすら思うのである。というのはその女性は敬太郎の見る角度が変わるごとに違った印象を与えるからなのである。

敬太郎は派出所の陰を上へ廻って車道へ降りた。さうしてペンキ塗の交番を楯に、巡査の立ってゐる横から女の顔を覗く様に見た。さうして基表情の變化に又驚ろかされた。今迄後姿を眺めて物陰にゐた時は、彼女を包む一色の目立たないコートと、其背の高さと、大きな廂髪とを材料に、想像の國で寧ろ自由過ぎる結論を弄あそんだのだが、斯うして彼女の知らない間に、其顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新しい人に始めて出逢った様な気がしない譯に行かなかった。要するに女は先刻より大變若く見えたのである。切に何物かを待ち受けてゐる其眼も其口も、たゞ生々した一種華やかな氣色に充ちて、夫より外の表情は毫も見當らなかった。敬太郎は其中に處女の無邪氣ささえ認めた。(10)

夕暮がせまり、刻々とその様相を変えていく大都会と同じく、その女性の印象もとらえ所がなく実体を見極めることが不可能なのである。その女性が偶然敬太郎の探していたホクロのある男性を待っていたことが分ると、敬太郎は2人の跡をつけ、2人が西洋料理店に入ると、女性と背中合せの席につき2人の話しに聞き耳をたてる。しかしその話しの内容は一貫性がなくまた断片的に過ぎ彼にはまるで要領を得ない。それは『新アラビア物語』の「医者とサラドガ・トランクの話」の中で、壁穴から隣室を覗いているアメリカ人スカダモアー青年が、ゼファリーン夫人と長身で太り気味の中年のイギリス人とのひそひそ話の内容が分らないのと同じである。実はこの2人はスカダモアーを陥れる計画を進めようとしていたのだ。間もなく彼は女性の筆跡で書かれているが署名がない舞踏会への招待状を受けとる。好奇心をおさえられず出かけていった彼は、やはりこの2人の姿を見つけ、ひそかに近づく聞き耳を立てる。ゼファリーン夫人と話しているイギリス人は実は自殺クラブの会長であり、『新アラビア物語』の主人公であるボヘミアの王子フロリゼルと彼につき従うジェラルデイン大佐の敵なのである。プリンス・フロリゼルはジェラルデイン大佐の弟と自殺クラブの会長とを大陸で決闘させることを決定し、大佐の弟の監視の下に自殺クラブの会長はパリに来ている。スカダモアーの出席した舞踏会にはゼファリーン夫人と会長の外に、会長を監視するジェラルデイン大佐の弟、それに偶然にかプリンス・フロリゼルとジェラルデイン大佐まで来ているのである。これ等の人々の関係をまったく知らない、アメリカ人の若者スカダモアーの視点を通して物語が進展して行くという構成になっている。スカダモアーは今度はプリンス・フロリゼルとジェラルデイン大佐の会話を盗み聞きする。スカダモアーがあちこちで盗み聞きす

る断片的会話は本人には理解出来なくても、やがては彼自身の身にふりかかる災難と密接に関係しているのである。

敬太郎が友人須永の家を訪ねようとした時、彼より先に入った女性の後姿を見かけて以来、あれこれと想像をめぐらし彼の念頭をさらないその当の女性を実際に目の前にしながら、彼女がその女性だとは知らずに、しかし非常に興味をかき立てられて観察する状況は、スカダモアーの置かれている状況と似ている所がある。しかし『新アラビア物語』の場合、「クリーム・タルトを持った若者の物語」をすでに読んでいる読者には予備知識があり、作中人物であるスカダモアーより有利な立場で事態を考えることができる。一方『彼岸過迄』では、読者も敬太郎同様、彼が尾行している2人づれの女性が田口の娘千代子であり、ホクロのある男性が須永の伯父松本であることを知らされていない。ということは『新アラビア物語』のように読者は有利な立場におかれるのではなく、敬太郎と同じ立場にあるため、敬太郎を通してのみ読者も2人を観察する。読者はこの点ではまさに敬太郎の主観的な冒険を共有できるのである。素人探偵を演じる敬太郎の世界は本質的に覗き見をする部外者のそれにとどまるもので、スカダモアーのように事件に巻き込まれることはない。敬太郎は登場人物としては、それぞれの話しをつなぐ役割を任けているが、事件の中に入らず「何事も演じ得ない門外漢」(11)にとどまるという点では読者とそう変らない立場にいる。

要するに人世に對して彼の有する最近の知識感情は悉く鼓膜の働きから來てゐる。森本に始まって松本に終る幾席かの長話は、最初廣く薄く彼を動かしつゝ漸々深く狭く彼を動かすに至って突如として己んだ。けれども彼は遂に其中に這れなかったのである。其所が彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所である。(12)

プリンス・フロリゼルはジェラルディン大佐と共に『新アラビア物語』のほとんどの物語に登場する。この作品は前半の「自殺クラブ」と後半の「ラージャ（インドの王）のダイヤモンド」とに分れている。彼はロンドンが提供する刺激と興奮を求める、都市空間の冒険者であり、「その高貴な生れによって定められている以上に、冒険に満ち常識を越えた生き方にたいする趣向を持ち合わせていた」(13)のである。その点では敬太郎と同じ趣向を共有しているが、プリンス・フロリゼルは自殺クラブの会員としてスペードのエースを、つまり死を意味するカードを引き当ててしまう。『新アラビア物語』の登場人物たちは何人といえども遅かれ早かれ事件に巻き込まれる運命から逃れられない。自殺クラブの会長はプリンス・フロリゼルに次のように冷然と指示を与える。

「シティに向ってストランド街の左側の歩道を歩いていくと、今部屋を出ていったばかりの紳士と出会うことになります。その紳士はあなたにどうすればよいか指示するでしょうが、どうか彼の言う通りに従って下さい。彼は今晚クラブの職務権限を与えられているの

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

ですから。それでは、楽しい散歩を」と会長は付け加えた。(14)

プリンス・フロリゼルはこの後ジェラルディン大佐と部下たちによってからくも命を救われるが、とにかく彼は自分の持つ特権、地位、能力のすべてを使って事態に対応しなければ生き残れないのである。実際彼は「自殺クラブ」の最後では、立会人のもとで会長と一对一の決闘をすることになる。

漱石は2年間のロンドン滞在中、都会生活の孤独と憂鬱を味わったが、その孤独感と憂鬱のかなりの部分は疎外された状況から生じてきたものであろう。大英博物館に通いつめることをせず、もっぱら下宿で勉強し、酒を飲まなかったので市民の交流の場であるパブ（大衆酒場）に出入りすることもなく、あまり豊かであるとはいえない生活費を切りつめて書籍ばかりを買っていたし、下宿生活にも馴染めず転々と下宿を変えた。五番目の下宿に長く逗留したのは気に入ったからというより、気に入る下宿を探して移ることがもはや面倒になり我慢してしまったという所らしい。だから『彼岸過迄』の結末部分で、敬太郎を「何事も演じ得ない門外漢」と決めつけた作者であるが、留学中の作者自身の姿とかさなりあう部分があるのかも知れない。

ロンドンの下宿に池田菊苗という理学者が訪ねてきた時、漱石は連夜学問上の議論をたたかわせ後で、「倫敦で池田君に逢ったのは、自分には大変な利益であった。御蔭で幽霊の様な文学をやめて、もっと組織だったどっしりした研究をやらうと思い始めた」(15)と回想している。『彼岸過迄』の森本の話の中には、幽霊物語めいた気味の悪いものが含まれている。「幽霊の様な文学」をやめて学問研究をと思った漱石だったが、結局は文学創作の道に入り、のみならず『夢十夜』のような幽霊物語を時として書いている。日本全国あちこちをわたり歩き経験豊富な森本は、敬太郎に様々な冒険譚を語って聞かせるが、その話しは時に妖怪談に近い妙なものとなって、だらしない彼の口髭の下から、いんぎんな調子で語られる。

彼が耶馬溪を通った序に、羅漢寺へ上って、日暮に一本道を急いで、杉並木の間を下りて来ると、突然一人の女と擦れ違った。其女は臙脂を塗って白粉をつけて、婚禮に行く時の髪を結って、裾模様の振袖に厚い帯を締めて、草履穿の俣たった一人すたすた羅漢寺の方へ上って行った。寺に用のある筈はなし、又寺の門はもう締まってゐるのに、女は盛装した俣暗い所をたった一人で上って行ったんださうである。(16)

森本の話はこの怪談めいたものを含めてローカルな話しがほとんどである。都会を舞台にした作品の中にローカルな話しが出てきても、前田愛氏が「仮象の街」で指摘しているように「『世間師』としての森本の豊富な見聞と知恵は、東京という大都会では無用の長物に近くなっていた」(17)といえるかもしれない。たとえば都会小説の典型である『新アラビア物語』にはローカルな要素はほとんど見当たらないし怪談も出てこない。しかし世紀末ロンド

ンが主たる舞台となる『吸血鬼ドラキュラ』では、ヨーロッパの辺境であるトランシルヴァニアという、ありとあらゆる迷信の結集する地方の状況と、当時文化的にも技術的にも先端をいく大都会ロンドンの状況があざやかに対比されている。このトランシルヴァニアからはるかに打って出て、ロンドン制覇をたくらむドラキュラと、それを阻止しようとする人間たちとの戦いは、地方対都会であり、また同時に過去対現在の戦いでもある。ドラキュラと人間たちとのこの戦いは情報戦の様相を帯びている。人間たちのリーダーであるアムステルダム のヴァン・ヘルシング教授はれっきとした合理精神の持主であり、「石橋をたたいて渡る」ほどの実証主義者でもある。だが彼は対ドラキュラ戦で十字架、ニンニク、それに聖餅や護符などいわゆる「神の息のかかった」武器を使う。彼がそれらの武器を使うのはそれらが時代遅れの長物などではなくドラキュラには有効であると認識しているからである。一方ドラキュラも、昔の科学である錬金術を身につけているのみならず、ロンドン攻略を思いついてからは、新しい外国語を勉強し、新しい社会学から科学にいたるまであらゆるものを辛抱強く学んでいる。ドラキュラ城の書斎には、ロンドン案内、華族名鑑、人名録、ホイットカーの年鑑、陸海軍要覧、『判例類聚』などおよそ英国と英国人の生活、習俗に関する名著という名著がほとんど網羅されている書棚がある。

敬太郎と森本は朝風呂をあびた後で、一緒に昼食をたべ、酒をふるまわれた森本がうながされて昔話をするのであるが、その話しは大都会の一隅、つまり本郷の台野の下宿で話されるのである。またこの柳田國男の民俗学という世間師たる森本の話はどのくらい信憑性があるかは疑問である。この森本の話しはアーサー・マッケンの『三人の詐欺師』のなかで、世紀末ロンドンの片隅で煙草をふかしながら、あるいは酒を飲みながら語られる詐欺師たちの話しと同じような重要性を持っている。森本という存在は都会の内包する地方の一部であり、また古めかしい時代おくれとなりつつある世界の一部でもある。そしてこの古めかしい世界は、彼が残していったステッキを媒介に、都会が持つもう一つの古くからある占いという伝統文化と結びついている。敬太郎がたのんだ婆さんの文銭占いが、彼に実際に幸運をもたらすのみならず、その好運が彼を田口や田口の娘千代子、松本とを結びつけるということによって、作品展開の上で重要な機能を果たしている。その意味では文銭占いもまたステッキも無用の長物ではないといえるのである。

マッケンの『三人の詐欺師』は『新アラビア物語』の影響を受けているが、直接的には影響関係のない『彼岸過迄』と構成面だけでなく、都会を舞台にしているということから出てくる類似性がある。もちろん『三人の詐欺師』と『彼岸過迄』は内容的にはまったくといってよいほど違っている。マッケンはウエールズのカーレオン・オン・アスクで牧師の息子として生まれた。カーレオンは昔ローマ人が侵入した際に作った街道や砦の遺跡が残っているところで、また古い伝説も数多く残っている神秘的な森と草地のひろがる地方であった。彼はロンドンの軍医学校の試験に落ちたことを機会にロンドンで古本屋に勤めながら、エッセイや創作を書くようになる。自伝である『彼比草』(Things Near and Far, 1923)には次のよう

に書かれている。

1894年の早春、前述の『三人の詐欺師』を書き始めたが、その本はかの幻想的なR・L・スティーブンスンの『新アラビア物語』の手法にたいしていただく私の甚大な尊敬の念を証明するものであり、またすでに述べたようにロンドンの知られざる側面の綿密な探求と、さらに望むらくは、恐怖小説における実験のいくばくかの独創性をも証明するものである。実験の独創性とは具体的にいうと妖精により拉致された教授の物語および白い粉を飲んだ法律を勉強する若者の物語において示される。(18)

『新アラビア物語』は前にもふれたように、まず前半の「自殺クラブ」にまつわる3つの物語、「クリーム・タルトを持った若者の話」、「医者とサラトガ・トランクの話」、「一頭立て二輪馬車の冒険」と後半の「ラージャのダイヤモンド」をめぐる4つの物語「バンドボックス（帽子入れ）の物語」、「聖職にある若者の話」、「緑のブラインドのおりた家の話」、「プリンス・フロリゼルと刑事の冒険」とに分けられる。それぞれの話しは独立した短編として読めないこともないが後半の「バンドボックスの話」を除くとプリンス・フロリゼルが一貫して登場するので全体としてはプリンスを主人公とする冒険譚ということになる。しかしたとえば「サラトガ・トランク」はサイラス・Q・スカダモアーというアメリカ人の若者が視点となっているし、「一頭立て二輪馬車の冒険」ではブラッケンベリイ・リッチ中尉、「バンド・ボックスの話」ではハリー・ハートレイという若い英国人、「聖職にある若者の話」はサイモン・ロールズ牧師、「緑のブラインドのおりた家の話」はフランシス・スクリムジアーという25才のスコットランド銀行員だった若者が視点となっている。視点といってもそう厳密な意味で機能しているわけではない。これらの話しに登場する若者は視点というより、それぞれの話しの主人公といった方がいいかも知れない。とするとプリンス・フロリゼルがほとんどの話しに登場するので、全編を通じての主人公といえるが、個々の話しで、はっきりと彼が主人公といえるのは一番最初の「クリーム・タルトを持った若者」と一番最後の「プリンス・フロリゼルと刑事の冒険」だけである。語り手はアラビア人の作者ということになっていて、その人物が次々に語る話しを「私」が書きとめる形式になっている。一方『彼岸過迄』の場合森本の話しは断片的なエピソードの連続で、時として敬太郎とのやりとりも入り、まとまった構成をもたない。千代子の話にはまとまりがあり敬太郎がその話しを聞いているのであるが、三人称で語られている。「須永の話」になると一人称の「僕」で語られ、「松本の話」も同じく一人称の「僕」で、須永も松本も敬太郎とさし向いで話している形式をとっている。だから敬太郎がすべての話しを聞いているので結局形としてはそう分りにくくはない。しかし『三人の詐欺師』の場合、構成はかなり分りにくいものになっている。ダイスンという文士と、チャールズ・フィリップスという物理学を専攻し人種学にうつつをぬかしている二人の人物に、デイヴィスとリッチモンドという男2人とヘレンという女の詐欺師が話しをする形式をと

っている。問題は彼らがそのつど偽名を使って話しをするので、だれが話しているか確認するのがやっかいなことである。

『三人の詐欺師』では「プロローグ」といわばエピローグにあたる「荒れ屋敷の怪事」とがつながっていて、円環構造を形成している。「すると、ジョゼフ・ウォルターズ君は、今夜はここへお泊まりというわけだね？」という書き出しで「プロローグ」が始まる。「プロローグ」で、とうとう三人の詐欺師に捕まってしまったこのジョゼフ・ウォルターズという若者が、次の章から彼らの追跡をかわして逃げまわっている。第2章の「金貨奇譚」で紹介される世界に一枚しかないといわれるテイベリウス金貨を、その若者が持って逃げていると信じている3人の詐欺師たちが彼を追跡しながらロンドンのいたる所に姿をあらわす。ダイスンとフィリップスとのどちらかに偶然この3人の詐欺師たちの誰れかが、追跡の過程で出会うことになる。詐欺師たちはジョゼフ・ウォルターズが金貨を持っているものと考えているが、実はその若者が追われている最中にその金貨を放り投げてしまい、それを偶然通りがかったダイスンが目撃して拾う。しかし詐欺師たちはまさかダイスンがその金貨を拾って持っているなどとは気が付かない。この作品ではこの偶然のほんのわずかな時間差というものが筋の展開の上で非常に重要な働きをしているのである。

「プロローグ」には荒れた廃屋でジョゼフ・ウォルターズを残酷なリンチにかけ殺した後で3人の詐欺師が姿を現わすが、3人が一緒に揃うのはこれが最初にして最後であるのだ。ひげをきれいに剃った、顔ののっぺりしたデイヴィスは、骨董屋のバートンと名のりダイスンに宝石をまきあげる話と「装飾的妄想」の話しを聞かせる。もう一人のリッチモンドはジンジャ色をしたひげと、同じ色の短く刈りこんだ顎ひげとが、はじめもなくいっしょくたにモジャモジャとのびている、あまり人相のゾッしない人物である。彼は秘書のウイルキンズと名のりダイスンに「暗黒の谷」の話しを語って聞かせる。ヘレンという美人、というより苦味のきいたおつな顔立ちの若い女性は、ミス・ラリーという名前でフィリップスに「黒い石印」の話しを、ミセス・ライセスターという名前でダイスンに「白い粉薬のはなし」を語る。この女性の話しはこの作品のなかで最も荒唐無稽でしかも胸の悪くなるような内容の話である。これら3人の詐欺師がロンドンの場末にある荒れはてた古屋敷から姿を消してわずか5分後にダイスンとフィリップスが連れ立って古屋敷にやってくる。つまりこの作品の構造全体がわずかな時間差の上からくもなり立っているといえる。第2章の「金貨奇譚」ではダイスンとフィリップスが偶然知り合った経緯と共に、ダイスンがテイベリウス金貨を手に入れた経緯が語られる。ダイスンがその金貨を手に入れたいきさつこそは、まさに一瞬の時間差が生みだした偶然の出来事である。

文士であるダイスンが書くことに疲れ、ふらりと散歩に出て、オックスフォード街の北の、静かな屋敷町を東に曲りトテナム・コート・ロードのあたりをぶらぶらする。そこで倉庫や高い塀のある寂しい所に出る。すると突然わきの細い露地から、一人の男がダイスンの鼻っ先に飛びだしてきたかと思うと、彼のそばを駆けぬけていく拍子に何かほうり投げて行く。そ

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

の男はそのままあっという間に横町に姿を消してしまう。その男が投げた光るものが溝にコロコロころがっていった落ちずに、うまく溝に渡してある棧の上にのっかる。それをひろい上げると、すぐにバタバタと足音がきこえたので、とっさに目の前の厩かなにかに身を隠す。そこへ一人の男が駆けて来てダイスの隠れているすぐそばを歩いていくが、目はギロギロ光り、白い歯をむきだして、片手にナイフを持っている。前の男とその男との間には、ものの50秒とない時間差しかない。

フィリップスにその話しをしてからダイスが溝の中から拾った物をチョッキのポケットから出すと、それは世界に一枚しかないといわれる「テイベリウス・ケイザー・オーガス帝」と銘のある金貨で、裏には半人半羊の牧神（フォーン）が立っている姿が刻まれている。物語はこのテイベリスウ金貨をめぐる展開していく。ダイスは金貨を放り投げた男の姿も、ナイフを持ってその男を追いかけた方の男の姿も暗いのでよく見ていない。またその二人の男たちもダイスの姿を見ていない。だからどこかの町で出くわしてもお互いに相手を確認することができないのである。追われている男がジョゼフ・ウォルターズで追いかけている男は詐欺師の頭であるリッチモンドであろうと見当がつくのは作品の終りに近い「眼鏡をかけた若い男のはなし」を読んでからである。以前に姿を見かけてはいるが、はっきり見ているわけではないので、相手が何者であるのか分らないという状況は、『彼岸過迄』の敬太郎と千代子との関係の場合も同様である。そうした状況は都会では頻繁に起こりうるものである。

ダイスとフィリップスはいわば『彼岸過迄』の敬太郎、須永、松本といった高等遊民のような存在である。2人が知り合うようになるのも「このロンドンの街頭で毎日何千となく起っている偶然の機会と一般」(19)であった。煙草に疑っているダイスがよく訪れるクイン街の煙草屋でフィリップスに会い意気投合して、3日にあらず、お互いの宿を往来するようになる。2人が初めて知り合いになるのは煙草屋でだが、実は『新アラビア物語』のボヘミアのプリンスであるフロリゼルは後日譚として、革命が起きてプリンスの地位を追われ亡命し、現在ロンドンのルーパート街で煙草屋の親父におさまっていることになっている。プリンス・フロリゼルが『新アラビア物語』で最後に落着いた煙草屋から、ダイスとフィリップスが初めて出会い『三人の詐欺師』の話が始まるようにしているのは、作者マッケンが意図的に仕組んだことのように見える。

ダイスが詐欺師の一人と知り合いになるのも街を歩いている時の偶然の出来事である。

ある日、ダイス氏はオックスフォード街を漫然と歩いていた。かれはひと仕事すんだあとの後味をしみじみ味わいながら、近ごろにないいい気分で、目に触れるものいちにちに穏やかな観察の目を凝らしながらゆっくりと歩いていた。行人、車馬、飾窓、そういうものをつぶさに観察していくと、なにかすばらしい香気で腕がムズムズしてくるような心持がする。かれは双肩に重責をになった人みみたいな深刻な顔をして、どんな些細なことに

も鋭い意味を見のがすまいと、右に左に油断なく目を配りながら歩いて行った。いまでも十字路のところで、荷物を満載した荷馬車にあやうく轢かれそうになったのは、急ぎ足で歩くことを好まないからであった。おまけに、きょうはまたばかに暑い日ときている。ちょうど繁華な盛り場のところまでやったきたときに、ふとかれは向こう側の歩道に、身なりのいい一人の男がとんだ格好をして跳ねているを目にとめて、思わず息をのんで、吸いよせられるように立ち止まった。(20)

その男は馬車がひっきりなしに行き交う道を危険をおかして横切ると、ダイスンに3分前にパン屋から出て来て来て馬車に飛び乗った、「頬ひげをはやして眼鏡をかけた、若い男」(21)を見かけなかったかと尋ねる。それがきっかけになって、ジンジャ色の顎ひげをモジャモジャ伸ばして、同じ色の口ひげといっしょくたになっているウイルキンズ（実はリッチモンド）と名の男と、ロンドンのカフェに行つて話しをする。シャンパンを飲みながらウイルキンズは「暗黒の谷」の話しを語り始める。それはスミスという人間に秘書として雇われ一緒に米国のコロラド州に行き、そこであやうく身代りとしてリンチにかけられそうになる話である。ウイルキンズの話しも次のミス・ラリー（ヘレン）の「黒い石印」の話しもロンドンで起きた事件ではないが、二人とも話しを自分の身の上話しから始め、ロンドンに上京してきたときの状況をかなり詳しく語る。とくに牧師の息子だというウイルキンズの話しおいたちは、作者マッケンのそれとほとんどダブっていて、マッケンのロンドンにたいする印象がそのまま投影されている。

ブラインドを下ろした灰色の家々、どこの大通りもほとんど人影がなく、街を歩いている人たちは、なんだか歩いているというよりも疲れてヨロヨロ足をひきずってるようで、なにを見ても、私の心は沈んでいくばかりでした。その晩はストランド街の近くの町の小さな宿屋に泊まりました。そこは父がたまの上京のおりに泊まった宿です。夕飯をすませてから、わたしは外出してみました。正直のところ、ストランド街やフリート街の雑踏やきらびやかさを目のあたりに見ても、ちっとも楽しくありませんでした。そのはずで、これだけの都会のなかに、ほんの顔見知りといえる人さえ、ただのひとりもわたしにはいなかったからです。(22)

マッケンのロンドン生活も、自伝で「ロンドンでただ一人」(23)というフレーズを小説の題名でもあるかのように「たえざる孤独の重荷」(24)を表現するものとしてくり返すほど淋しいものであった。田舎出のマッケンも都会の憂鬱と孤独を漱石同様に味わったのである。

ところでウイルキンズは「暗黒の谷」での恐ろしい話をしめくくる際に、姿をくらましたスミスが彼をつけねらっていて、いつバツタリと顔を合わせるかかもしれないと思うと戦々競々として心の休まることがないという。それに対してダイスンは、警察に訴えでればいいわけ

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

で、スミスをそう恐がることはないという。第一ダイスンの受けた感じからいうと、ウイルキンズは相手の男が馬車で行ってしまい止められなかったことをくやしがり、がっかりしていたように見えたのである。つまりウイルキンズが頬ひげをはやし眼鏡をかけた、若い男、ジョゼフ・ウォルターズを追いかけていたことをダイスンはあやまらず観察していた。ウイルキンズと別れたダイスンは、「冷静に考えてみると、ウイルキンズという今の男のようすには、そんな奇怪な経験目録などまるで考えられもしない、なんだか少々妙なものがあつたこと」(25)に気づいている。

フィリップスがミス・ラリーの話しを聞くにいたるいきさつは、ホルボーンにほど近いレッド・ライオン・スクエアの奥の下宿から散歩に出て、ライセスター・スクエアのベンチに腰をかけたことから始まる。ベンチの反対側の端に座っている若い女性と話をする羽目になるが、彼女が語る兄の失踪はつい今しがた起つたばかりの出来事らしい。その兄というのが妹ミス・ラリーが言うには「色白で黒い顎ひげをはやし眼鏡をかけ、しじゅうビクビクしたような顔をしている」ということである。それはまさしくウイルキンズが追いかけていた人物(ジョゼフ・ウォルターズ)とそっくりなのである。その兄を連れ去つた男の手はミス・ラリーの話しでは「まるでお墓のなかで何年も腐っていたような、ぐちゃぐちゃな、形もなにもない物になっているのを見たのです。肉は一本一本骨からはなれて、ガサガサに乾いてぶら下がり、兄の腕にかけている五本の指はまるで畸形な獣の爪のようで、先が腐ってなくなり、木の切株みたいになっている」(26)のである。その話を聞いた直後フィリップスはミス・ラリーのしなやかで、白くて、暖かい手をとって脈をみることになる。指と手は次にヘレンがライセスターと名をかえてダイスンに語る「白い粉薬のはなし」にも関連し、「プロログ」でヘレンとして登場するときに持っている紙包みにつつんだポタポタ汁をしたたたらすもの(恐らくは指)とも関連していく。ピーター・ペンゾルトという批評家はこの手と指への作者のこだわりを、自慰行為への罪の意識から来ているとフロイ德的に解釈を下している。(27)

「黒い石印」ではミス・ラリー、「白い粉薬のはなし」ではライセスター夫人という偽名でヘレンが語る話しはそれぞれが奇怪な、いわば進化の過程を逆行する変身譚を含んでいる。だがその前に、やはり彼女のロンドンに出て来たときのつらい経験が語られる。彼女は場末にいちばん安い部屋を借りて3度の食事はパンとお茶だけで腹をふさげ、必死に職探しをするが一向に見つからない。『三人の詐欺師』ではすべての出来事は、たとえそれがロンドン以外の地方で起る出来事であろうとも、あたかもガス灯のかなたの白い霧の中から幻燈画のようにたち現われて来るかのようである。もう死んでもかまわないと思いつめ、ひとりで町をフラフラあてもなく歩くミス・ラリーは、とある町角を曲ったときに、街灯の下から現れた人物に声をかけられる。そのとたんに、彼女はその場にヘタリこみ泣き出してしまう。結局その声をかけた人物に彼女は、家庭教師として雇われることになる。その人物はグレッグ教授といって人種学の権威であった。彼はミス・ラリーにロンドンについてこう語る。

いいかね、ロンドンというところはね、ラリーさん、どこもあけっぱなしな、無防備なところじゃないのだよ。妙に入り組んだ濠を二重にも三重にもめぐらした、とても用心堅固なところなんだよ。大都会はどこでもそうだが、生活条件というものがじつに大がかりな機構になっておってね。地方から男女がワッと場所をとりて殺到してくるのに備えて、矢来をめぐらしたり、そればかりじゃない、そいつを乗り切るには妙術のいる地下道だの、落とし穴だの、いやもう、いろんな巧妙な仕掛けがズラリと並んでできているとこさ。(28)

そしてグレッグ教授がいうには、都会で成功する秘訣というものは、それを心得ている人間が、人に教えようと思っても教えられない、フリーメーソン（はじめは石工相互の救済組織だったが、18世紀のはじめに、一般人も入会できるようになった、規約の厳格な秘密結社）の重要個条みたいなものだと言ふ。「黒い石印」の話はミス・ラリーのロンドンへのイニシエーションを経てからやっと始まる。

家庭教師と同時に教授の秘書役もかねているミス・ラリーはやがて、教授が密かにグレー・ヒルの石灰岩に記された楔形文字の研究をしていることを教えられる。その15年前の日付のある石灰岩に書いてあったのと同じ文字が、4,000年前の長さ2インチの黒い石に刻まれていて、その石を教授は所有していて、何とか解読しようとしているのである。マッケンはこうした解説し難い謎の古代文字や、世界に一枚しかないテイベリウス金貨やポンポニウス・メラの『天体位相』、古代地理学者の書いた『ソナリス』など架空の小道具や書物を好んで使う。それはスティーヴンスンのラージャのダイヤモンドであり、M.R. ジェームズ (Montague Rhodes James, 1862 - 1936) のほとんどすべての短編に使われている判読出来ない古代文字や、銅版画、笛、貼雑帖などと同類のものである。

ミス・ラリーが読んだ古代地理学者の書いた『ソナリス』の60石という60の文字が記された石に関する記録から、黒い石印の謎が解読される。しかしその結果教授は命を失うことになる。この「なにか途方もない夢物語の序章」めいた話は教授の残した手掛り「英国学士会会員ウィリアム・グレッグノ声明」である程度見当のつくものとなる。つまり古代から伝説として語られる妖精は実は「美し」くも「良く」もない邪悪そのもののような存在である「矮人」であり、今だに生き残って僻村で娘をおそったりしているのである。教授はその「矮人」と対決して命を落とす。彼の残した手記の内容で庄巻とも言えるのは、ジャーヴェイズという「矮人」の血を受けた知恵遅れの少年が、ナメクジに変身する下りであろう。

余ノ目堵セル光景ハ愴懼言ウベカラザル、人間ノ思考ト想像ノカヲコエタル凄惨酸鼻ノ景ナリキ。床上ニ横タワレル小童ノ軀軀ヨリ兀トシテ何物カ衝キ出デ、突トシテ伸ビルト見ルヤ、忽チニシテヌラヌラ、ウネウネシタル触角様ノモノトナリ、室ノカナタニ達スルトオボシク、戸棚ノ上ニアリシ胸像ヲムズト掴ミテ、几上ニ下ロシスエヌ。(29)

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

このジャーヴェイズ少年のナメクジへの変身と、ミス・ラリーがライセスターと名前を変えて語る「白い粉薬のはなし」でのフランシス青年の変身というより、溶解とが対応している。白い粉薬というと、スティーズンスンの『ジギル博士とハイド氏』(*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hide*, 1886)の白い塩の結晶を思い出すが、スランシスの飲む粉薬の場合も、「問屋からちょっとばかり不純な塩剤を仕入れた」(30)ものが20年も棚ざらしになっているうちに自然に化学変化を起し、いわゆるサバトの酒の元が偶然に出来上ったのである。

ダーウィン(Darwin, 1809-82)の進化論では自然が劣等な生物を淘汰して、生物が進化していくことになっているがハイド氏は進化の道を逆行している。ライセスターはハイド氏のように退化するというより、はるかにダイナミックに逆行しほとんどドロドロの原形質にまで還元されてしまうことになる。

部屋の隅の床の上には、目もあてられない糜爛と腐敗にドロドロに溶けくずれた、どす黒い穢物の塊がありました。まるで煮えくりかえった瀝青みたいに、ブクブク油ぎった泡をふきながら、見ている目の前でどンドン溶けて形が変わっていく、液体でも固体でもない、なんだかドロドロの塊でした。そして、そのドロドロになった塊のまんなかから、眼のようなギラギラしたものが二つ光っていて、よく見ると、手だか足だか、どうやらそれらしいものがウニョウニョ動いており、あれが腕かと思われるようなものが、ムクムク動いて持ち上がっているのが見えます。(31)

これと同じ様な奇怪なことがマッケンの作品「パンの大神」(“The Great God Pan”, 1894)でも起こる。パンの神に犯された母親から生まれたヘレン・ボーンという女性が最後に自殺するとき、彼女の体はすごいスピードで進化の道を逆行し、ついにはドロドロしたまっ黒い液体に還元されてしまう。その退化のプロセスで一瞬パンの姿にもなるのである。19世紀末ロンドンの激しく移り変わり、めまぐるしく膨張していく生活環境下にあっては、ウイルキンズやミス・ラリーのように地方から出てきたばかりの人間のみならず、都会生活に慣れた市民ですら、時には適応することがかなり苦痛であったに違いない。ヴィクトリア朝時代(1837-1901)の独立独行のセルフ・メイド・マンですら進歩発展のかけ声に歩調を合わせ前進しつつも、どこかに後ろ髪を引かれる思いを残していたのである。

激しいアクションがある所にはリアクションがある。技術的な進歩や、急激な都会化は古くからの継続性、たとえば安定した地方の生活を疎外し、個人をその過去から切り離してしまう。その場合個人は社会的にも個人的な面でも過去から切り離され、また当然、子供時代のアニミスティックな感性からも切り離される。こうした疎外状況から生じてくるのがスティヴンスンのハイド氏でありマッケンのパンの神である。ハイド氏とパンはヴィクトリア朝時代に特有な解決不能な内的葛藤の力強いシンボルであるのだ。この変身した一種の二重存在の片われは、元の存在とまったく違う様相を呈し、いわば邪悪な部分が凝縮され、性的

な放縦のイメージが濃厚な悪の化身そのものである。ジギル博士はハイド氏に変身すると毛むくじゃらになり、文字通り小さく縮まるし、マッケンの「黒い石印」には有史以前から存在する邪悪な「矮人」が登場する。

『ジギル博士とハイド氏』に登場する弁護士アタスンの心には幻灯画のように、「いちめんの街灯のかがやいている夜の都会」(32)を足早に歩き、子供を踏み倒し、泣き叫ぶ悲鳴などには耳もかさずに立ち去っていくハイド氏のイメージが映し出される。ハイド氏は道を尋ねた老紳士に、方向を指し示す代りに、持っているステッキでその紳士をめった打ちにし殺人の凶器に使う。『彼岸過迄』では舗道に投げ落されて敬太郎に進むべき方向を指し示したステッキは、ハイド氏の場合、言語道断な残虐さでなぐりつけたためにまっ二つに折れてしまう。この明暗を分けるそれぞれの作品でのステッキの使われ方が、作品そのもののそれ以後の展開の仕方のみならず特徴を決めていく。敬太郎はステッキによって好運をさずかるが、それは最早や探偵のまねごとなどをして大都会をさ迷うことなどはやめて、安定した地位を得ることを意味する。彼は地位を得てからは、都会の探索者として人間を外側から見るのではなく、人間の内部に目を向けるようになる。一方『ジギル博士とハイド氏』は、ますますあらわに大都会を舞台にした探偵小説の相貌を帯びてくる。この作品の場合、弁護士のアタスンがミスター・ハイド（隠れ役）に対抗してミスター・シーク（捜し役）の役割、要するに探偵役を務めている。

『新アラビア物語』と『ジギル博士とハイド氏』、それに『三人の詐欺師』、『彼岸過迄』に共通な探偵小説的特徴の中で最も著しいのは、頭の中で純粹に推理を行なうことなく、探索であり、追跡や尾行といった都市空間の移動にまつわるものである。重要なことは、この空間的移動が時間の流れと連動しているだけでなく、身体的な変化や変身とも連動していることである。日が暮れていくにつれ刻々とその相貌を変えていく小川町の停留所と同じく、敬太郎が注目している女性の印象も、ほんの少し違った場所から眺めたり、わずかな時間差で眺めるごとに、「全く新しい人に始めて出逢う」ように変化し、捉え所がない。一卷の幻灯画のように弁護士アタスンが思い浮べるのは「街灯の光の冴えた都会の、広い迷路のようなところを、だんだん足早に、さらにさらに足早に、ついには眼にもとまらぬほどの速さで走りまわって、街角という街角で、子供を踏み倒しては、泣き叫ぶままに打ち捨てていく」(33)ハイドの姿である。さらに、「その男には顔がなく、あっても、それはきまった顔ではなく、かれの眼の前でぼうっと消えてしまうような」(34)実体のないものである。アタスンは何としてでもハイド氏の顔をはっきり確認したいという「異常ともいふべき好奇心」(35)のとりこになってゆく。

「全く新しい人に始めて出逢う」ような変化や、顔があっても「決った顔」ではないような変化は、当時にあってはつきつめると、「どこことって畸型なところがないのに出来そこないの印象を与える」(35)と同時に、「得体の知れない厭な気持、憎悪、恐怖の念」(36)を人に与える、つまり正体を現わした「悪魔の極印つきの」(37)ハイド氏の顔となる。また一方

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

では、ジギル博士と同様白い粉薬、塩剤を飲んだライセスターのように、進化の道をあっというまに逆行し、原形をまったく留めない「液体でも固体でもない、なんだかドロドロした塊」に解体し、還元されてしまう。

『新アラビア物語』には、前にも述べたように、それぞれの短編ごとに独立した主人公といってもよい若者が登場する。前編を通じての主人公プリンス・フロリゼルは時の流れとともにそれぞれの短編の主人公の視点から、「全く新しい人に始めて出逢う」ようにとらえられる。『三人の詐欺師』には、話しが変わるごとに名前を変えた詐欺師たちが登場してくる。彼等の話しの中にはほとんどといってよい程共通して登場してくるただ一人の人物がいる。その人物が全編を通してひたすら逃げている、頬ひげをはやして眼鏡をかけオドオドした臆病くさい若い男（ジョゼフ・ウォルターズ）である。だがその若者は、ウイルキンズの話では、ミスという凶悪な犯罪を平気で犯す大悪党であり、ミス・ラリーの話では、拉致されて行く彼女の兄であり、バートンの話では彼が手に入れるはずの宝石を持ち逃げしたロビンズという男のことになる。いずれの話しにも共通しているのは、顔つきが同じで、態度がオドオドしているというだけで、それ以外は名前も経歴も性格もバラバラで、およそアイデンティティが欠如している。

この眼鏡をかけ頬ひげのある若者がある居酒屋でとうとう詐欺師につかまる現場に、ダイスンが偶然居あわせる。そのときたまたま落ちた小さな旧式の手帳をダイスンは拾い上げ、「眼鏡をかけた若い男のはなし」、つまりジョゼフ・ウォルターズの逃げまわる理由を読者もダイスンもやっと知ることになるのである。

手記の冒頭にはクラークンウエルの貧民窟に身をひそめているウォルターズが、身辺にしないで敵の包囲網がせばめられていることに気付き、誰かよい人の手に渡ることを願って手記を書きだしたということが記されている。学問に身をささげようと一念発起し、国立図書館にかよい始めるが、リプシウスという人間と知り合い、快楽主義を吹き込まれ、気がついた時には秘密結社の一員となり最早や抜きさしならない状況に落ちこんでいる自分を発見する。やがて彼も悪事に加担させられるようになるが、あるときリプシウスにテイベリウス金貨を巻き上げる手助けをするようにいわれる。リプシウスはウォルターズに次のような指示を与える。

・・・今夜七時半ごろに、きみはハンプステッド・ロードを静かに歩いてヴィンセント街まで行く。ヴィンセント街を曲がって、しばらく行き、三つ目の横町を曲がると、ランバート台に出る。・・・とにかくこの町の角のところに正八時にいること。・・・白いひげをはやした老紳士が立っている。その老紳士はね、チェニーズ街へ行くつもりのところを、シーン街へ連れて来られたというので、辻馬車に文句をいっているはずだ。(38)

これこそまさに『彼岸過迄』で田口が敬太郎に与える指示そっくりであるが、それはまた『新アラビア物語』で悪党どもが罪のない若者に与える指示とそっくりでもある。ただこの場合、時間というものが最も重要な役割を果たして少しでも手順が狂い時間がずれたならば全ての歯車がかみ合わなくなるような精妙な計画なのである。とにかく例の金貨を所持しているその白いひげの紳士はウォルターズにだまされて、リプシウスの家に連れ込まれることになる。ウォルターズは巻き上げた金貨を見せてもらい手に持って眺めている時に、即席ミイラにされた白ひげの老人に気付く、そのまま恐怖にかられて逃亡する。方角もわからずに往来に出て盲滅法走っているあいだに金貨はどこかに放り投げてしまう。その金貨を偶然ダイスンが拾うことになる。以来ウォルターズは、リプシウスの手下である三人の密偵、「なにかわけがあって世に隠れていたいと思っている人たちの身元・動静を洗う点にかけては、じつに驚くべき腕を持っている」(39) 連中、リッチモンド、デイヴィス、ヘレンにつけまわされる運命に落ち込んだのである。

手記の中で「言語に絶したひどい拷問にかけられる凄惨な光景」(40) を目に浮かべると記しているウォルターズは、最後の「荒れ屋敷の怪事」でその通りの拷問による凄惨な死にざまを、3人の詐欺師が屋敷を去ってからわずか5分後にそこにやって来たフィリップスとダイスンに発見される。『三人の詐欺師』では「プロローグ」とエピローグとが結びついて円環構造を成しているの、内容的にはいつまでたっても堂々巡りをするばかりで始めも終わりもはっきりしないといえるのである。この時間的特性は、敬太郎の持つ「自分の様な又他人の様な、長い様な又短い様な、出る様な又這入る様な」(41) ステッキの持つ空間的な特性と結びつく。始めか終りかははっきりせず、また所属や出处進退が明らかでない不確実性と不安定性は、都会における時間の流れと空間的移動と結び付く。そして前にも述べたように、この時間の流れと空間的移動とが、人間の肉体的な変化を含む、変貌とも緊密に結び付いていく。『三人の詐欺師』においては、登場する詐欺師たちは、時と場所を変えて姿を現すごとに偽名を使い違った人物に変貌している。ウイルキンズを名乗ったリッチモンドとミス・ラリー、ミス・ライセスターを名乗ったヘレンとは、フィリップスやダイスンへの話しで、ロンドンに始めてやって来たとき、都会生活にうまく適応出来ず、職にもつけない苦しい経験をしている。その体験話は、信憑性の乏しいこれらの2人の詐欺師の話しの中で、恐らく本音だと思える部分である。しかし作者マッケン自身のロンドン体験を反映しているような2人の話しが意味を持つのは、未経験で右往左往していた彼等が都会生活におけるイニシエーションを済ませると、やがて経験を積み変貌して、海千山千の詐欺師になりおおせることである。またウイルキンズの語る米国コロラド州での事件にせよ、ミス・ラリーの語るウェールズとおぼしき地方での「矮人」の話にせよ、ロンドン市内のカフェや、公園での回想として語られる形式をとっている。それらのどちらにも大都会ロンドン生活へのイニシエーションがだしに付け加えられている。つまりロンドン以外で起った事件にしても、何等かの形でロンドンが関わり、影を落している。とにかく『三人の詐欺師』はあらゆる点で、最も都会的な小説

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

であると言える作品である。ミス・ライセスターの弟は部屋に閉じこもり勉強ばかりして、ロンドンでの生活に馴染もうとせず、ついに体調をくずすに至る。「目のふちになんとなく不安の影が見えだして、どこか気懶い様子」(42)を見せるライセスターは治療薬として白い粉薬を常用するようになる。はるばるインドからやって来た「世間で申す快樂などにはまるで風馬牛で生きているような」(43)ライセスター青年に、都会生活が与える不安は、漱石が「倫敦塔」の冒頭で述べている不安と同種のものである。「表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかった。此響き、此群集の中に二年住んで居たら吾が神経の繊維も遂には鍋の中の麩海苔の如くベトベトになるだらうとマクス、ノルダウの退化論を今更の如く大眞理と思ふ」(44)という表現を、都会生活の与える不安から薬を飲み始め、ついには文字通り五体が退化しドロドロに溶けくずれていくライセスター青年の状況を比較すると、共に精神的不安の行きつくはてを表現した比喩としての意味合いを持っていることに気付く。

『三人の詐欺師』はそれぞれ独立した短編が偶然によりつなぎ合わされて長編小説を形成しているが、それぞれの話しの内容はまったく違っていて関連が乏しい場合がほとんどである。つまり時間的、空間的な偶然の出来事が、あくまでも最も強い絆として機能しているのである。『彼岸過迄』の文銭占いの婆さんが、まったく違う色の2本の糸を丹念に繕り上げていくように、大都会という所は異質な要素が偶然に結びつく機会をいくらかでも与え得るのである。しかしその事は裏を返せば、またすぐ離れ離れになる可能性があることを意味し、都会のいわば生理に支配される限りにおいては、個々の話しの結び付きが弱くなるのは避けられない。「プロローグ」で一緒に姿を現わす3人の詐欺師達がそれ以後決して互いに顔を合わすこともなくそれぞれの話が次々に展開していくのも、オーソドックスな『アラビアン・ナイト』の語り口の手法を踏襲したというより、都市の生理に従っていると考えることもできるのである。

〈注〉

- 1) 夏目漱石、『漱石全集第十巻、彼岸過迄』(東京・岩波書店、1956)、P.17.
- 2) *Ibid.*, P.17.
- 3) *Ibid.*, P.18.
- 4) 稲垣端穂、『夏目漱石と倫敦留学』(東京：吾妻書房、1990)、P.20.
- 5) 夏目漱石、『漱石全集第三巻、「倫敦塔」』(東京：岩波書店、1956)、P.5.
- 6) 『夏目漱石と倫敦留学』、P.88.
- 7) *Ibid.*, P.6.
- 8) 『彼岸過迄』、P.79.
- 9) *Ibid.*, P.76.

- 10) *Ibid.*, PP.98 – 99.
- 11) *Ibid.*, P.275.
- 12) *Ibid.*, P.277.
- 13) *Robert Louis Stevenson, New Arabian Nights in The Works of Robert Louis Stevenson, vol.1 (London: William Heinemann, 1924), P.1.*
- 14) *Ibid.*, P.28.
- 15) 『夏目漱石と倫敦留学』、P.138.
- 16) 『彼岸過迄』、P.15.
- 17) 前田愛、「仮象の街」、「漱石作品論集成第八巻——『彼岸過迄』」所収（東京：桜楓社、1991）、P.115.
- 18) *Arthur Machen, 『彼此草』 (Things Near and Far in The Works of Arthur Machen, vol.9): London: Martin Secker, 1923), P.100.*
- 19) アーサー・マッケン、『怪奇クラブ』（*The Three Impostors*）（東京：東京創元社、1970）P.15.
- 20) *Ibid.*, P.28.
- 21) *Ibid.*, P.29.
- 22) *Ibid.*, P.35.
- 23) 『彼此草』、P.11.
- 24) *Ibid.*, P.11.
- 25) 『怪奇クラブ』、P.60.
- 26) *Ibid.*, P.68.
- 27) *Peter Penzoldt, The Supernatural in Fiction (New York: Humanities Press, 1965), PP.160 – 164.*
- 28) 『怪奇クラブ』、P.79.
- 29) *Ibid.*, P.127.
- 30) *Ibid.*, P.191.
- 31) *Ibid.*, P.186.
- 32) スティーヴンスン：『ジークル博士とハイド氏』（東京：新潮社、昭和42年）、P.20.
- 33) *Ibid.*, P.20.
- 34) *Ibid.*, P.20.
- 35) *Ibid.*, P.25.
- 36) *Ibid.*, P.25.
- 37) *Ibid.*, P.25.
- 38) *Ibid.*, PP.213 – 214.
- 39) *Ibid.*, P.222.
- 40) *Ibid.*, P.223.
- 41) 『彼岸過迄』、P.76.

英米文学と日本文学の怪奇小説の比較

42) 『怪奇クラブ』、P.167.

43) *Ibid.*, P.167.

44) 『漱石全集第三巻、「倫敦塔」』、P.5.

(かない こうへい)

(みうら きよひろ)